

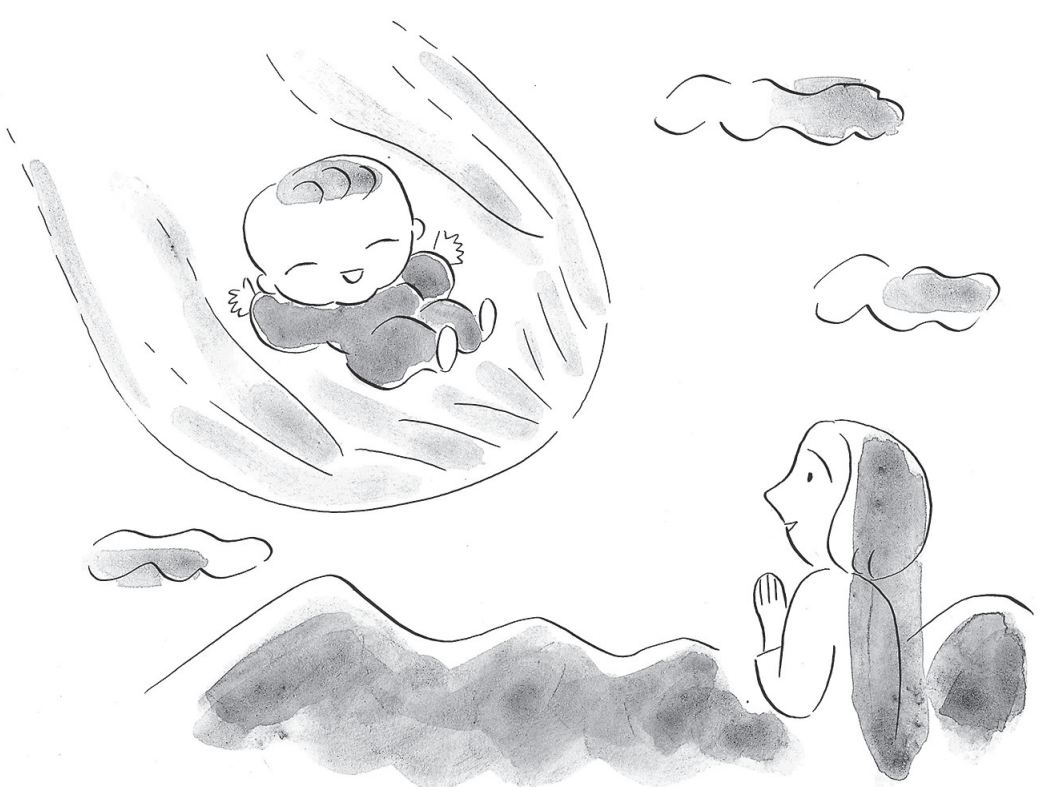
み教えの言葉を学ぶ

げん そう え こう

還相回向

—再びこの世に戻って人々を教化—

浄土真宗のみ教えを伝えるためのキーワード、「往生浄土」「悪人正機」「現生正定聚」「還相回向」について本願寺派総合研究所の満井秀城副所長に解説していただきます。今号は「還相回向」です。



え/ひじ みえ

み教えの言葉を学ぶ⑦

阿彌陀さまから届けられる「往相」「還相」の二回向

前回(4月20日号)、「現生正定聚」は浄土真宗だけの特別な法義であることを申しました。今回の「還相回向」も、浄土真宗ならではの特別な法義だと私は考えています。少なくとも、「往相」「還相」の二回向が、浄土真宗教義の綱格(基本的枠組)であることは、疑いの余地がありません。それは、宗親親鸞聖人の主著である『教行信証』の「教行信証」冒頭に、つづしんで浄土真宗を案する「二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり」と示されているからです。これを「往相」「還相」として「往相回向」と「還相回向」の途中までが「往相回向」、そして「証文類」の後半に「還相回向」が示されているのが「教行信証」の構成です。

最初に用語の意味ですが、「往相」とは、往生浄土の相状(「私が、浄土に往生するありよう」のこと)。「還相」とは、還来穢土の相状(「浄土に往生した私が、再びこの世の迷いの世界に還って来るありよう」のこと)で、そのいずれもが阿彌陀仏からの「回向」(「阿彌陀さまから、私に届けられること」)であるとするのが、「往還二回向」です。

浄土真宗のみ教えを伝えた七高僧の第三祖に数えられる曇鸞大師は『往生論註』で、第十八願(本願を信じ、念仏申す者を、浄土に迎え取る)、第十一願(浄土に往生した者は、必ず「往還二回向」です)。

最初にも満たない赤ちゃんと亡くなったとします。お母さんから、「この子は成仏しているでしょうか」と聞かれたときに、皆さんならどう返答されますか。言うまでもなく、私たち凡夫は、他者の往生や成仏の可否を判断できる立場にはありません。判断できるのは仏の知見のみなのですが、その上でどう考えられるでしょうか。1歳にもならない赤ちゃんなら、お聴聞もしたことはないでしょうし、お念仏の一返も

筆者 満井 秀城



本願寺派総合研究所副所長。司教。

お念仏の「縁を届けてくれた」「還相の菩薩」と味わう

この「還相回向」が、浄土真宗だけの特別な法義だと私が考えるのは、例えば次のような場合を想定してみてください。

1歳にも満たない赤ちゃんと亡くなったとします。お母さんから、「この子は成仏しているでしょうか」と聞かれたときに、皆さんならどう返答されますか。言うまでもなく、私たち凡夫は、他者の往生や成仏の可否を判断できる立場にはありません。判断できるのは仏の知見のみなのですが、その上でどう考えられるでしょうか。1歳にもならない赤ちゃんなら、お聴聞もしたことはないでしょうし、お念仏の一返も

今生で「還相の菩薩行」を実践?

時折、信心恵まれた者が今生で「往相」の行を「還相の菩薩行」とする人たちがいて、これを一般に「信後還相」と称しています。私たちの実践行を「菩薩行」とするのは、尊くもあり、励みにもなるだろうとは思いますが、これはどう考えても無理があると思えます。

本文に見た「論註」のもともとの義でも、「還相」は浄土に往生した後とされています。すし、親鸞聖人も同様です。『教行信証』の中で「還相回向」についての説明が、阿彌陀さまのほたらきをいただいた私たちの心相をあらわす「信文類」にあるのなら、「信後還相」が成立するかもしれません。しかし実際には、私たちがいたくそとをあらわす「証文類」の後半にあります。つまり、浄土に往生して仏とならせていただいた者の慈悲行として、再びこの世に戻るほたらきを「還相」に示されているのです。

「信後還相」を語らなければ、実践の意義を見出せないとするなら、常行大悲(つねに大悲のはたらきを行す)の「の身になる」という、現生十益(「註釈版聖典」(別巻))を軽視していることとなります。曇鸞大師や親鸞聖人の説示に反して、「信後還相」を手張するのは賛同できません。

称えたいことではないでしょう。第十八願に誓われる、「本願を信じ、念仏申す」身になつていないのですから、顔面通りに受け取った「迷っている」としか言えなくなります。だから、浄土真宗などでは「追善供養」が必要になるのです。しかし、私たち浄土真宗では次のような味わいが可能なと考えています。もちろん、先にも述べたように、私たちは往生や成仏の可否を判断できません。その上で、「還相回向」の法義を知る私たちなら、愛しいわが子を亡くした悲しみの中にあっても、後から振り返って「この子のおかげで、仏さまに手を合わせることができた」と思えるようになった時、この子は私にとって「還相の菩薩(私をお浄土へと導くために還相回向のほたらきとしてあらわれてくださった菩薩)」だったと味わうことが可能だと思えます。

かく申し上げるのは、かつて桐深順忍という和尚が、学生時代の思い出として次のような話を述べておられたからです。

仲の良い数人の友人とお酒を飲み交わしていたときのこと。お酒がまわってきたからでしょうか、1人の友人が別の友人にこう語りかけたそうでした。「僕たちは、こうして、共にお念仏を喜ぶ身となって幸せだけど、君だけは幸せじゃない」と言うのです。そう言われた友人は、「どうしてだい」と聞き返します。その友人は、「お父さんが神道系の新興宗教の熱心な信者で、その場の人たちは、皆そのことを知っていました。だっと思っていてもみろよ。僕らは皆念仏者としてお浄土で会えるけど、君だけは親子別々ないか」と言うのです。するとその友人は、「君は本当に、そう思うのか」と真顔になって詰問します。場がいつぱんに凍りましたが、「だっ、そうだろう」と同じ理屈を繰り返します。

これに対して「僕は、そうは思わない」と、さっぱり断言します。「確かに父は、熱心な新興宗教の信者だ。でも、こうやって僕を龍谷大学に入れてくれて、そのおかげで君たちとも会えた。僕に念仏の縁を届けてくれた父は、やはり浄土で会えると思う」と言ったそうです。「還相回向」の法義なら、尊い話であったことを、今も鮮明に記憶しています。

法然聖人も還相回向説かれた?

法然聖人にも「還相回向」が見られるという先生もおられますが、私はそうは考えていません。法然聖人が「還相回向」を説いているように見える部分は、実は「応化身(仏が、自在な姿を顕すこと)」「だと思ふ」のです。

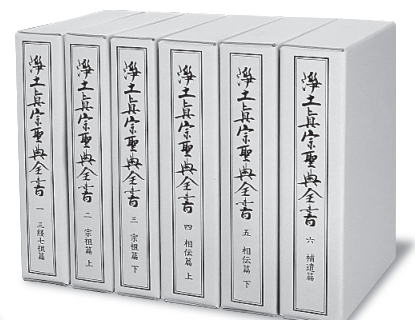
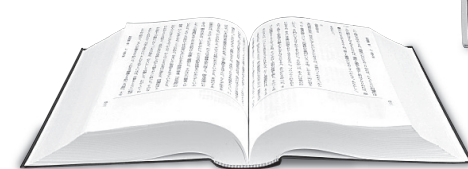
なぜそう思うのかと言つと、「往相」「還相」の二回向は、曇鸞大師の『往生論註』に出てくる語(「註釈版聖典七祖篇」(別巻))なのですが、法然聖人は「論註」については、「選撰集」の中では最初の「二門章」に冒頭の難易二道の文を引用されるだけで、中核をなす「往還二回向」の文や「二種法身」「広略相入」などのご文には、まったく触れられていないからです。

シリーズ堂々完結! 第六巻ついに発刊

第一巻から第五巻までの収録内容を補完する典籍・史資料集。法然聖人の著述・法語、親鸞聖人を中心とした系譜、本願寺成立に関わる文書等を掲載。

1,564頁/本体 6,500円+税

最新刊 第六巻 補遺篇



既刊

全巻 B6 変型判上製/函入

第二巻 宗祖篇上 1,214頁 本体 5,000円+税 『顕浄土真実教行証文類』『三帖和讃』など、宗親親鸞聖人の著述を掲載。

第四巻 相伝篇上 1,566頁 本体 6,500円+税 宗祖の教えを伝える、覚如上人の『報恩講記』や存覚上人の『浄土真要鈔』などを掲載。

第一巻 三経七祖篇 1,428頁 本体 6,000円+税 浄土経の根本聖典である『浄土三部経』及び七高僧の著述を掲載。

第三巻 宗祖篇下 1,210頁 本体 5,500円+税 『阿彌陀経註』『西方指南抄』などを収録。前巻とあわせて宗祖の著作を網羅する。

第五巻 相伝篇下 1,456頁 本体 6,000円+税 浄土真宗中興の祖・蓮如上人の「御文章」を含む著書や言行録、さらには関係聖教を網羅する。

浄土真宗の根本と伝統 — 先師の歩まれた道が明らかになる

浄土真宗聖典全書

※FAX番号のお間違いにご注意ください 〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺) http://hongwanji-shuppan.com/

最新刊 第三巻

親鸞聖人750回大遠忌を機縁として、これまでの研究成果を反映させ、半世紀ぶりにより充実した形で再編集した増補改訂版。

A5判/744頁/函入 本体 5,000円+税



増補改訂 本願寺史

親鸞聖人750回大遠忌を機縁として、これまでの研究成果を反映させ、半世紀ぶりにより充実した形で再編集した増補改訂版。本願寺史料研究所 編

第一巻 親鸞聖人のご生涯から戦国時代末期までの中世における本願寺教団の成立とあゆみ。 A5判/626頁/函入 本体 5,000円+税

第二巻 安土・桃山時代から江戸時代末期までの近世における本願寺教団のあゆみ。 A5判/726頁/函入 本体 5,000円+税